

早稲田大学 社会科学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	全問マーク式
試験時間	60分(現代文1問、現古1問)
難易度	昨年より難化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「言語生活に潜む危機」について。出典：古井由吉『始まりの言葉』。

(本文字数：約 2700 字 = 昨年より約 1400 字減少。設問数：9 = 昨年より1問減少。)

小問	難易度	コメント
問一	やや易	【漢字】 の「大過なく」は「大きな失敗もなく」という意味。
問二・A	標準	【空欄補充】副詞の補充。あきれた様子でじっくりと眺める様子を表す語。
問二・B	標準	【空欄補充】直後の「そらおそろしさ」の言い換え。選択肢の慣用表現の知識も問われている。
問二・C	標準	【空欄補充】直前の段落の内容との対比、及び、「会議後」という場面から判断する。
問二・D	標準	【空欄補充】最後の二段落の内容から判断する。
問三	やや易	【脱落文挿入】脱落文の入る前の内容が脱落文と同趣旨の場所を選ぶ。
問四	易	【傍線部説明】傍線部前後の文脈から明らかだろう。
問五	標準	【傍線部説明】「この境域」とは「責任の取りようもない限界」の領域。あとは、傍線部の内容と選択肢とを照合する。
問六	やや難	【理由説明】1と4で迷うが、直前にある「虚弱ながらの固陋さ」という逆接表現に着目するとよい。
問七	易	【傍線部説明】傍線部の内容と選択肢を照合するだけで解ける。
問八	易	【傍線部説明】選択肢を見るだけでも判断できる。
問九	やや難	【内容合致】3と4の判断が難しい。3は、最後の二段落の内容から考える。4は、3ページの3行目に「響かせあう」のは「思いより感じより」とあることから判断する。

(二) 現代文(現古融合文)。「王朝時代と中世における女人遁世」について。

出典:久保田淳『久保田淳著作選集』第三巻。

(本文字数:約 2400 字 = 昨年より約 200 字減少。設問数:8 = 昨年より1問減少。)

小問	難易度	コメント
問十・イ 問十・ロ	やや難 標準	【文脈把握】引用されている古文を正確に読んでいないと解けない。 【文脈把握】引用文の2行後の「男の愛情……しまう女」から、4か5にしぼれる。5だと女が出家する必要がなくなってしまう文脈上おかしい。古文だけからでも判断できる。
問十一	易	【文法問題】は「らる」、は「ぬ」、は「めり」、の一部である。
問十二	標準	【空欄補充】引用されている古文を正確に読んでいないと解けない。
問十三	難	【空欄補充】空欄の直前の内容から補充する和歌を選ぶ。原典を読んだことがないと、1を選んでしまっても仕方がないかもしれない。難問。
問十四	標準	【文脈把握】6ページの2～4行目から判断する。
問十五	易	【文学史】基本的な文学史の問題。6が鎌倉末期に成立したことは必須の知識。
問十六	易	【文脈把握】6ページの4行目が決め手。空欄は「中世の女性」の説明なので、3や4だと限定しすぎになってしまう。
問十七	やや易	【内容合致】紛らわしい選択肢もなく容易。

〔総合コメント・今後の指針〕

大問一の評論文は昨年並み、大問二の現古融合文が昨年よりやや難化した。

大問一は、「言語生活に潜む危機」についての評論文。具体例が多く示されているとはいえ、主旨をややつかみにくい文章である。ただし、設問は、問六と問九以外はそれほど難しくないので、例年通り高得点をとる必要があると思われる。本文から答えの根拠をしっかりと見つけたうえで選択肢を吟味するという姿勢を身につけることが望まれる。

大問二は、「王朝時代と中世における女人遁世」についての現古融合文。昨年と同様に、現代文と古文との対応をおさえて解く設問はあまりなく、純粋な古文の読解力や知識が問われる設問が目立った。問十三の和歌を補充する設問はかなりの難問だが、本校では、直前講習テキスト『早大の古文』の【一】で、『今物語』の該当箇所を扱ったので難なく正解を選べたと思う。問十のイ、問十二、あたりは引用されている古文をかなり正確に読んでいないと歯が立たない設問。現古融合文が出題されるからといって油断することなく、古文の学習をすすめてもらいたい。